第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　言語を手掛かりとしながら，文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり，目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章，文学的な文章，実用的な文章），古典（古文，漢文）といった題材を対象とし，言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては，大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく，異なる種類や分野の文章などを組み合わせた，複数の題材による問題を含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　「キャラクター」及び「〈キャラ〉」について論じた二つの文章を並置し，両者の主張を正確に理解した上でその接点を考察できるかを問うた。【文章Ⅰ】は，大塚英志『江藤淳と少女フェミニズム的戦後――サブカルチャー文学論序章』（ちくま学芸文庫　2004年，初刊・筑摩書房2001年）より一部抜粋したもの（約2,200字），【文章Ⅱ】は，西兼志「コミュニケーションのvectorとしての〈キャラ〉――indi-visualコミュニケーション」（石田英敬ほか編『デジタル・スタディーズ２　メディア表象』東京大学出版会　2015年）より一部抜粋したもの（約1,700字）である。前者では，手塚治虫の「キャラクター」がナショナリズムの根拠となり得ないように設計されていることが述べられており，後者では，「〈キャラ〉」がヒトを模したものであることに由来する可能性が追究されているが，排他性の乗り越えを志向する存在として「キャラクター」・「〈キャラ〉」を捉える点では通底している。

問１の漢字問題は，各問とも正答率は高めであった。問２では，手塚が描く「キャラクター」の特質を，問３では，その特質が「汎世界化」に結びつくとする筆者の問題意識を正確に理解できているかを問うた。問４は，【文章Ⅱ】で示されている「記号のピラミッド」の図を用いた新傾向の問題であり，正答率は低めであった。問５では，「〈キャラ〉」の特性を「ロゴ」との対比で理解できるかを問うた。ここまでの問いを踏まえ，問６では【文章Ⅰ】から窺える手塚とインタビュアーのすれ違いが，【文章Ⅱ】を参照することで説明できることに気付いていく生徒たちの会話を提示した。(ⅰ)で「キャラクター」と「〈キャラ〉」の違いを確認し，(ⅱ)で両者の共通項としての「〈顔〉」に光を当て，(ⅲ)において(ⅰ)で確認した違いは必ずしも矛盾するものではないことへの気付きを問うた。(ⅰ)～(ⅲ)の正答率にはばらつきが見られたが，全体としての難易度は妥当であった。

第２問　野呂邦暢「鳥たちの河口」は，1973年発表で，「ネイチャー・ライティング」と評される作品である。出題箇所は，「男」が河口で鳥の観察をしながら，かつて印刷会社の社長から写真集を出すことを持ちかけられた時のことを回想する一節である。文章は平易であるが，回想形式で示される過去と現在の変化，「男」と社長それぞれの思い，その背後にある状況（「男」の事情，鳥たちの変化），また「男」の内言に見られるレトリックを捉えることを求める出題である。受験者の基礎的な読解力を測ることのできる適切な問題であった。

問１は，印刷会社の社長が登場する場面の状況をつかみ，「鼻白む」の字義と前後の文脈に配慮して，「鼻白む」理由を捉える読解力を問うた。基礎学力を問うものとして適切であった。問２は，本文の展開をつかみながら，社長の発言に対する「男」の反応について，その様子を説明する読解力を問うた。登場人物の関係の展開を問うものとして適切であった。問３は，「砂丘の上を歩きまわりながらしゃべりつづけた」という社長の行動について，そのふるまいが意味す

ることを，前後の文脈から捉える読解力を問うた。登場人物の特徴を捉える問いとして適切であった。問４は，社長の人物像に関する過去の時点における「男」の受け止め方と現在のそれのあいだにある変容を捉えることができるかを問うた。時間経過による人物理解の変化を問うものとして適切であった。問５は，「男」が鳥と自分を重ねながらどのような思いを抱いているかについて，本文における「男」に関する記述から捉える読解力を問うた。主人公の生きる姿勢の変化に注目させる問いとして適切であった。問６(ⅰ)は，文章全体を読み，時間の流れを整理する力を問うた。場面が行き来する時間の展開を，本文の記述を基に的確に捉える読解力を問うものとして適切であった。問６(ⅱ)は，(ⅰ)を踏まえ，文章全体を読む中で「男」の変化の内容を捉える総合的な読解力を問うた。作品全体の理解を問うものとして適切であった。問７は，本文の理解をより深めるために，本文の表現や内容の特徴について文章を書くという言語活動を設定し，(ⅰ)では文章の内容の特徴について捉えることができるかを問うた。また，(ⅱ)では二つの文章の着眼点を比較する力を問うた。生徒が書いた文章内容を分析する力を問うものとして適切であった。

第３問　本問は，室町時代の幸若舞『景清』からの出題とした。また，問５では浄瑠璃『出世景清』を提示し，【ワークシート】に従って二つの作品を読み比べながら内容を深く理解する学習活動を設定した。基本的な単語や文法の知識を土台に古文を的確に読み取る力，作品の内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材や問題設定であったと考えている。

問１は，本文の読解に必要な基本的な単語の知識及び表現を理解する力を問うた。問２は，基本的な文法の知識及び本文の表現を根拠に，本文の内容を理解する力を問うた。問３は，1段落に描かれる阿古王の考えを読み取ることができるかを問うた。問４は，3段落に描かれる景清の様子を読み取ることができるかを問うた。問５(ⅰ)は，景清を描いたもう一つの素材として示された『出世景清』の全体像を読み取る力を問い，(ⅱ)は読み比べを行った上で，登場人物の役割を考察する力を問うた。

各設問の正答率を見ると，下位層から上位層まで適切に分布しており，識別力も高い設問であったことが分かる。難易度も概ね適切であり，共通テストにふさわしい問題であったと言える。

第４問　明末清初期の思想家である賀貽孫の著作を素材とした。明清時代の思想家の文章は受験者にとってなじみがないと思われるが，出題した文章は戦国時代の諸子百家の文章に範をとって著されており，文章のジャンルとしては，高等学校における学習内容に含まれると言える。本文の字数は，210字であり標準的な分量である。

本文では，海魚の巨大な在り方に理想を見出す禿翁(李贄)の見解がまず提示され，その上で，変幻自在に姿を変える竜の在り方を理想とする筆者の見解が対置されている。本文は単数素材ではあるが，複数素材に準じた構成の文章であり，対立する見解を読み比べさせることを通じて，中心論点とこれについての見解の相違を的確に把握する読解力を問うことができる。

各設問の出題意図と結果は次のとおりである。問１は，漢文の基礎的な語彙と句法を問うた。問２は，本文理解の中心となる比喩の理解を問うた。問３は，反語の句法を踏まえて文脈に応じた解釈ができるかを問うた。本問は，「豈」のような反語表現に典型的な助字が含まれていない点が難しく，正答率が低かった。問４は，文脈に沿って「彼」「人」が何を指しているかを問うた。問６は，仮定の句法を理解して，正しく解釈できるかを問うた。問７は，文章全体の論旨として，禿翁の見解と，これに対する筆者の論評を理解できているかを問うた。

各設問ともに正答率は標準的な数値であり，識別力も適切な数値となっている。共通テストにふさわしい問題であった。

３　自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第１問　【文章Ⅰ】は，受験者の理解度が手塚治虫漫画への親しみの度合いに比例するのではないか,【文章Ⅱ】は論旨や用いられている語彙が晦渋であるとの指摘もあったが，二つの文章を合わせ読むことが,「キャラクター」・「〈キャラ〉」と呼ばれる存在を多角的に捉えることを可能にする問題であったと考える。論理的かつ抽象的な文章の内容を的確に読み取る力や思考力を確認する上で，また，難易度においても適切な素材文であったとの評価を受けた。ただ，問１では漢字の訓読みも問うたほうがよい，二つの文章における用語の定義の曖昧さが各設問の解きがたさにつながっているとの指摘もあったため，今後は更に適切な出題となるよう作問に努めたい。問６に関しては，問題のレイアウトが受験者に見えにくいとの指摘もあったが，二つの文章の内容について，生徒たちが対話的な学びを通して理解を深めていく学習過程を重視した問い方となっており，受験者の日頃の学習活動を踏まえたものであるとの評価も受けた。

第２問　「男」の視点を中心にその内面について丁寧に描写されており，心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であったとの評価を得た。「書くこと」の言語活動につながる場面設定がなされたことは「書くこと」の学習活動の充実につながるものとして評価された。今後も適切な出題となるよう作問に努めたい。

第３問　素材，文章量，難易度，配点ともに適切であるとの評価をいただいた。また，我が国の言語文化の一つである幸若舞や浄瑠璃の一節が扱われており，令和７年度以降の共通テストの出題範囲となる「言語文化」の指導の充実に資するものであったとの評価を得た。表現や用語は受験者の混乱を招くものはなく適正であり，また，配点についても設問の内容に見合っているとの意見をいただいた。さらには，同じ人物を題材とした複数の文章の内容を比較検討することで，登場人物の設定のねらいについて考察する学習の過程を重視した問い方となっており，受験者の日頃の学習活動を踏まえたものであると考えられるとも評価された。今後も素材文の魅力や価値を十分に生かし，受験者が文章や資料から得た情報を多面的・多角的な視点から解釈する力を発揮することのできる出題を心がけたい。

第４問　素材文の文章レベルと文章量は，妥当であるとの評価を得た。句法・語彙に関する設問は，基本的な知識を問うことを意識して作成しており，結果としても，高等学校における漢文の学習成果を見る上で適切な難易度であると評価された。

設問によっては(注)をヒントに解答できるとの指摘があったが，本文の正確な把握を抜きにして(注)のみを頼りに正答を導き出せる設問はなく，「本文理解を助ける」という(注)の趣旨として妥当な内容であった。(注)の内容については，今後も繁簡のバランスを含めて適切なものとなるよう留意したい。また，共通テストの特色をより反映して，言語活動の過程や多面的な視点からの解釈を作問に取り入れることを求める意見があった。言語活動の採用は他の大問との兼ね合いを考慮する必要があるが，言語活動の有無に関わりなく，解釈・批評や読み比べを内容に含めることによって，多面的な読解力の涵養を促す作問を心がけたい。

４　ま　と　め

第１問　本問では，文章を丁寧に読解する能力を問うことを基本とし，その上で二種類の文章から得られた情報を比較・検討しながら再解釈する能力を問う問題構成を意識した。二つの素材文の組み合わせ方には課題が残るが，出題内容・難易度は概ね適切であり，学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問は，高等学校での学習を通して身に付けた力を評価するのに妥当であるとの評価を受けた。今後も生徒の学習過程を意識した問題作成に努めたい。

第２問　基本的な読解力を判定する上で，適切な出題であったと言える。授業で教師から出された「本文の表現や内容について自分の考えをまとめよう」という課題について，生徒たちが考えたことを文章にまとめるという言語活動を重視した学習場面が設定されている点が評価された。今後も「書くこと」に関する言語活動の学習場面の設定について，更なる改善に努めたい。

第３問　単語・文法などの基礎的な知識を活用し，文脈を踏まえて作品を読解する力を問う設問や，複数のテクストを比べることでより深い理解を導く設問など，高等学校における古文の学習成果を適切に評価できるような出題となった。今後も入念に素材を吟味するとともに，各問の設定やリード文の工夫などによって，受験者の学力を適切に測る作問を心がけたい。

第４問　語彙・語法の理解に裏付けられた読解力と，思考力の双方を測ることができるようにバランスを勘案し，高等学校における漢文の学習成果を総合的に評価する作問ができたと考える。今後も，素材文の検討を入念に行い，漢文への興味を喚起し思考力・判断力等の養成を促すことができる出題を心がける。また，設問の形式，選択肢，(注)についても受験者が取り組みやすくなるよう一層の工夫を重ねていきたい。